

策定懇話会

総括

○雇用創出部会 座長

山形銀行小国支店長 布施 和宏 氏……………71

○人の流れ創造部会 座長

新潟県立大学教授 山中 知彦 氏……………72

○結婚・出産・子育て部会 座長

(有)地域環境デザイン研究所長 宮原 博通 氏……………74

○地域創生・暮らし安心部会 座長

法政大学教授 関司 直也 氏……………75

小国町地域創生総合戦略策定懇話会参加に際しての所感

山形銀行小国支店長 布施 和 宏

懇話会概要の趣意説明をいただいた当初、普段、金融・銀行業務に浸りきっている自分自身を客観視した時に、ファシリテーターとしては役不足ではないだろうか、という懸念はかなりあった。しかし、当ワーキンググループのメンバーから個性豊かな意見を活発に発表していただいたおかげで一応の「まとめ」に辿り着くことができたのではないだろうかと半分自負している。メンバーのみなさまには本当に感謝の言葉しかありません。

当ワーキンググループのテーマ「雇用の創出」であるが、横断的に様々な職種・立場からのアプローチにより、お互いが想像できないような発想や提案を聴くことができ、たいへん有意義な意見交換の場であった。また、「雇用を創出するにはどうしたらいいか？どんな産業や事業を興したらいいか？」という主命題を議論していくと、「供給側の理論≒計画策定側の理論」となりがちになることにも気付かされた。そうした上で「需要側＝求職者あるいは新規就業希望者」の視点から見えてきた、求人と希望職種のミスマッチの問題や子育て・介護支援等の雇用を取り巻く諸問題にまで議論を発展させ、命題をある程度深掘りすることができたのではないかと思っている。

私たちのワーキンググループには高校生は参加していなかったが、最終回の合同懇話会においては他グループの高校生の意見を聴くことができ、新鮮な思いがした。彼らの発想には興味あるものも多く見られ、頼もしく思われた方も多かったのではないだろうか。しかも、若い人たちの意見に耳を傾けることで彼らに当事者意識や行政への参画意識が芽生えるだけでなく、彼らにとっても合意形成のプロセスを学ぶ場としても有効だったに違いない。来年の参議院選挙から18歳以上に選挙権が与えられるが、「感覚」を磨くためにも小国町のこれからのためにも、今後もこういった機会の場には是非若い人を誘っていただきたいと切望する。

「人の流れ創造部会」をふり返って

新潟県立大学教授 山中知彦

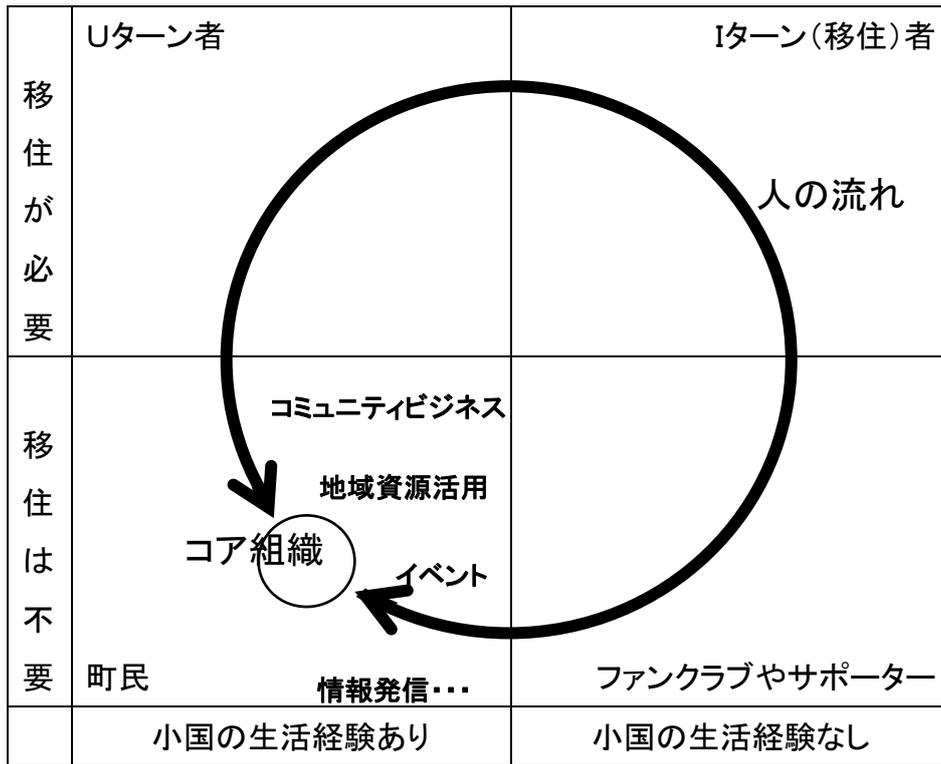
1回目から2回目の頭にかけての話し合いは、メンバーがフラットで親密な関係を築くために、各々の経験を披露しあい、共有部分を探ることから始めました。その結果見えてきたのは、それぞれがふるさと小国への思いを自覚するきっかけが、身近な人とのつながりから発しているというごく当たり前の事実でした。一方で、小国町の中で動いている人どうしのつながりは、それほど緊密ではなさそうだということも見えてきました。声高に「移住促進」を唱えるよりも、まずは町の中の人をつなかりを緊密にして、そこから少しずつ外に広げていくのがよさそうだというのが、スタートだったように思います。

2回目に事務局から住民アンケート結果や町の計画の説明を受けた後の話し合いでも、人の流れのコアになるのは小国の町民で、徐々にファンクラブやサポーター～Uターン者～Iターン(移住)者へと波及させていくのがよさそうだという考えが深められ、具体的な提案も出て盛り上がりました。山口さん差し入れの手作りクッキーが効いたようです。そこで、次回に向けて、各自が提案をまとめるという宿題を出しました。

3回目に提出された提案は、5人それぞれの個性が反映した秀作ぞろいでした。佐藤君からは、中高生のアンケート結果を読みこんだ「小国病院でのオープンホスピタル」という高校生とは思えない秀逸なアイデア。同じ高校生の船山怜奈さんからは、「天然氷で町おこし」など地域資源をとらえる瑞々しい感性。船山和樹さんからは、「町民イベント団体の橋がけ」をはじめとする実現可能性のあるコミュニティビジネス。山口さんからもOGN(小国を元気にするネットワーク)を強化した実体験に即したコミュニティビジネス。安部さんからは、雇用面・地元活性面・娯楽面それぞれからの多面的な事業提案と客観的な事業評価のフレーム。

3回にわたる5人の話し合いを模式図にしてみたのが下図です。

4回目の合同部会では、他の3部会でも活発な話し合いが行われていたことが確認でき、小国町民の力を実感することができました。



部会活動の振り返り

(有)地域環境デザイン研究所長 宮原博通

今回の小国町地域創生総合戦略策定懇話会における「結婚・出産・子育て部会」は、3回という極めて少ない時間ではあったが、この部会のテーマについて、多様な角度から多岐にわたる意見が出されたことは大変有意義であったと考えます。

それはメンバーが、高校生をはじめ社会の中でのポジションが多岐に亘り、また女性の参加も多く、ディスカッションを行う上でより効果的であったように思います。

「結婚・出産・子育て部会」では、部会の趣旨に則りディスカッションを展開するものの、究極は、居心地の良い、活力に満ちた“まち”づくりにつながっていくという認識の上に立ち、多様な角度からアイデアが出されました。

そのひとつである、FM放送局の開設なども地域のコミュニティづくりに貢献するものとして、今後大いに期待が寄せられるものであろうかと思えます。

また、この部会活動においてディスカッションしたことをメンバーそれぞれが各々の所属機関に対し、共鳴共感の場づくりとして、の活動成果の報告会などを開催し、実践的な展開に向けてのきっかけづくりをされることが望ましいと考えます。

町が積極的にこのようなアプローチを仕掛けていくことは、いずれ協働のまちづくりへの展開に功を奏するに違いないと思われます。

今回は、国の総合戦略における4つの「基本目標」に対応する形で4つの部会が組まれたわけですが、4つの部会はそれぞれに関係し合っていることから、“共通の社会基盤づくり”という視点で、もう少し議論を深めたい気がしました。

つまり、その社会基盤といえるものこそ、第4次小国町総合計画の実現に向けて土台となる部分であると思えます。

とりわけ、小国町の持つ自然資源、社会資源の活用とそれに伴う地域コミュニティの維持形成は、社会基盤構築の根幹をなす部分であり、この部分の全町一体となつての共鳴共感づくりが小国町に真の豊かさをもたらすものであると信じています。

町民が「自分ごと」に落とし込める総合戦略を

法政大学教授 関 司 直 也

懇話会の「地域創造・暮らし安心部会」の座長を務めさせて頂きました関司です。まず、大学等での所用のために、部会自体には第2回、第3回の2回しかお伺いできなかったことをお詫び申し上げます。その点で、私自身、委員の皆さんともう少し腰を落ち着けてじっくりお話したかった（できれば夜の懇親会でのお付き合いまで）点が悔やまれております。

それでも、委員の皆さんからは意見を闊達に出して頂き、大変有り難く進行をさせて頂きました。初回には、いきなり町レベルの議論を始めるのは大変だろうということで、まずは自分の身の回りから将来のことを考えるべく、自分の家族構成を描き出してもらい、10年後、つまり家族が皆10歳、齢を重ねた時、家族は、集落は、町全体はどうなっているか、また、どうなっていて欲しいか、を考えて頂きました。

そうすると、委員それぞれの個性も反映しながら、「自分ごと→家族ごと→集落ごと→地区ごと…」というように、具体的な将来への期待や課題が率直に語られたように思います。それを受けて、第2回では、5つの主体（高齢者／現役層／子育て層／若者層（子供たちも含めて））に分けながら、暮らしの中で感じている不満や、将来的な不安、それに対する手立てについて議論を深め、第3回にも繋げていきました。

結果として部会から提起された論点としては、「子どもを産める環境づくり」、「仕事（働き方）」、「各地区での取り組みの共有」、「若者同士の集う場づくり」というものでした。挙げた項目を目にすれば、これまでの総合計画でも掲げられていたものばかりのようにも見えてしまいます。それでも、今回の懇話会での議論の積み重ねからすれば、委員の皆さんから寄せられた現場の生々しい様子や実感にこそ、その本質が体现されていると言えるでしょう。

その点で、この総合戦略が固まった暁には、その内容を委員の皆さんはもちろんですが、町民の皆さんのところまで、どのような形で届けていくのかが、かなり大事になってきます。まさに、国が音頭をとった「まち・ひと・しごと」の政策枠組みが、一体、小国町における暮らしにどのように関わってくるのか、また、その中で、町民それぞれがどのような役割を担っていく必要があるのか、国から小国町へ、さらには「地区ごと→集落ごと→家族ごと→自分ごと」へと落とし込んでいける場づくりが求められます。（総合戦略を住民に伝える場のアレンジを工夫すべく議論を始めている

地域も出てきています。)

小国町における地方創生は、まさにこれからスタートを切ろうとしています。短期間でありながら熱心な議論の上にまとめられた総合戦略に、町民の皆さんの熱い「魂」が込められ、ひとつでも具体的な形が実現していくことを期待し、私も今後の展開を見届けていきたいと思っています。